



～ 思春期を生きる（２）～

校長 小木曾敏樹

夜が嫌だった。夜といっても眠る前、ベッドに入ってから眠りに入るまでの、あの暗い時間が大嫌いだった。だって、何も面白いことなど考えないから。頭に浮かぶのは、嫌なことばかりだから……。だから、寝付けなくて、とっても大嫌いなその暗い時間は、とっても長かった。

何も考えず、何も思わず、早く眠りにつきたいのに、なぜか必ずいろいろなことが頭の中に浮かんでしまう。あいつに言われたこと、思い出したくないのに、急によみがえってムカムカして眠れなくなる。消えてしまえ。最後は頭の中で相手を消し去ってしまわなくては、終わらない。

1年前のことが毎日のように頭を駆けめぐる。大好きだった野球を諦めざるを得なくした、あいつらのこと。先輩に気に入られようとペコペコして、先輩に気に入られたやつだけが練習に参加できて、サボりと決めつけられた自分は常に悪者扱い。野球は下手なくせにリーダーぶっているあいつらから受けたひどい仕打ち、あいつらが楽しく部活をしているシーンが毎日頭に浮かんでしまう。消えてしまえ。毎日彼らのことを消しては、心を落ち着かせるしか方法がなかった。

2年生になり、幼なじみと同じクラスになった。気が合う友達もできた。大嫌いなワルたちがいないクラスになった。不登校ではなくなったものの、連続して休まないだけで、ちょくちょくと学校を休んでいた。嫌なことばかりが頭に浮かんで、寝られない。朝は起きられないから学校を休むことになってしまう。

クラスが良くなったからといって、自分が暗いトンネルから抜け出せたわけではない。最悪の1年生の時に比べれば、2年生の毎日は間違いなく楽しかった。でも、いつも、心がもやもやしていた。いつもどこかでイライラしていた。そして、いつも自分のことが大嫌いだった。

クラスの女子と楽しく話をしている陽キャ（陽気な人）な仲間たちは、毎日を楽しんでいる。女子に話しかけることなどできない自分は、きっと陰キャ（陰気な人）だと思われているに違いない。女子に近づきたくなかった。自分が嫌いで、自分のことを臭いと思っているわけだから、女子に近づくということは、自分からわざわざ嫌われに行くようなものだ。自分を傷つけないために、傷つく可能性があるところには近づかない。自分の存在はなるべく消して、何も言われないうちに、何も感じさせないようにしていた。廊下は必ず一番端っこを歩いていた。そうやって、どんどんと陰キャになっていく自分のことがまた嫌いになっていく。心の中で、陽キャな仲間たちにも思ってしまった。消えてしまえ。とってもいい人たちだったのに、私は心の中で消し去っていた。

誰かがひそひそ話をしていると、間違いなく自分のことを言われていると思った。誰かがちらっと自分の方を見たことに気付くと、瞬間的にこの後に起きる自分への悪口やひそひそ話を想像して恐怖を感じた。自分の机が並びからズれていると、誰かが蹴ったのだと思った。掃除時間に自分の机の列が運ばれていないと、自分の机に触りたくないから放置されていると思って急いで自分で運んだ。グループ決めで同じ班になってしまった女子には、私と一緒にグループになってしまってゴメンと思った。係決めとかは、最後に余るまで動かなかった。自分から動いて嫌がられるのが怖いから、自分から余った者になった。

周りから嫌われていると思った。臭いと思われていると思った。汚いと思われていると思った。

だから、いつもどこかで心が緊張していて、毎日毎日とても疲れていた。自分の周りの嫌な存在を、想像の中で消し去っていくことで、ぎりぎりの状態だった自分の心を保っていたのだろう。

何人の人を、何回、私は消し去ってきたのだろう。そんなことばかり考えているから、もし自分が死んだなら・・・、なんて考えてしまい、死後の世界が怖くて、また眠れなくなっていた。

私にとって救いだったのは、学校をどれだけ休んでも、母は何も言わなかったことだ。がんばれとか、学校に行かなきゃとか、どうしてとか、勉強はどうするのか・・・、何も言わなかった。家でぐずぐずしていると、「今日は休むのか？」と聞く。「うん。」と答えると、「何て電話する？」と聞く。「かぜ。」と言うと、母は学校に電話をしてくれた。分かっていたはずだった。風邪でもなく、腹痛でも下痢でもなく、学校に行ける健康な体であることを。でも、たぶん一度も言われたことはない。

ただ、一回だけ、心に刺さる出来事があった。家からは出たものの、行きたくなくて、イヤでイヤで仕方なくて、胸が痛くなるくらい行きたくなくて、通学途中の道路にうずくまってしまっていた時、ふと気付くと、後ろに母がいた。「そんなことしてると、恥ずかしいよ。帰ろ。」って。振り向くと母は泣いていた。母は何もかもを知っていたのだろう。知っていて、何も言わなかったのだろう。そして、家を出た後の私を、そっと後ろから見ていたのだと思う。母の涙は、誰のどんな言葉よりも痛かった。

そんな日々が続いているのに、クラスの女の子に恋をしてしまった。きれいで、やさしくて、賢くて、明るくて、とっても輝いている子だった。1年生の頃は2年・3年の先輩たちが教室まで見に来るほどの子で、学年で断トツ人気 NO.1 だろう。ある日、男子ばかりで誰のことが好きとか言い合った時、そこにいた全ての男子が彼女の名を口にした。そんな子のことを好きになってしまったものだから、ライバルが多いとか、勝負とか、そういう問題ではなく、嫌われていて、臭くて、汚くて、カッコ悪くて、陰キャで、学校を休む、弱くて情けない自分が、振り向いてさえももらえない全くの対象外で、視界にも入らない存在であることが悲しくて、毎日涙を流していた。

嫌なことばかりがあって、嫌なことばかりを思い出して、毎日誰かに、消えてしまえと消し去っていた夜は終わり、毎日涙を流す夜に変わっていった。

夜が嫌で、何も考えたくなくて、音楽を聴いたり、ギターを弾いたり、夜遅くまでそうやって心を働かせないようにして、眠くなるのを待っていた。

こんな人生はもう嫌だと、心の底から思っていた。

仲間に相談したことがある。「自分は どうしてこんなにも嫌われているんだろう」と。

「は？」

これが仲間からの答えだった。仲間は、私が嫌われていること、臭い、気持ち悪いと思われ、避けられていることに気付いていなかった。一生懸命説明をしたが、全然分かってもらえなかった。そういうふうに、気付かないという振りをして、私を傷つけないようにしてくれている、やさしい仲間なのかと思った。

私には手の届くはずがない、毎日苦しくて、悲しくて泣いて過ごした、人気 NO.1 の彼女は、その後、どういうわけか、私の彼女となった。それが全校に、先生たちにまで情報が広がった。そうしたら、今まで嫌われていると思っていた感覚がなくなった。人の視線に恐怖も感じなくなった。つまり、嫌われている、臭い、気持ち悪いと、自分勝手に思い込んで、一人で悩み、一人苦しんでいただけの勘違いだった。教師になってよく分かった。思春期ってそういうものなんだと。

今、昔の私みたいに自分が嫌だと思っている君、そんなことはないんだよ。君は素敵なんだ。

いつも誰かの視線を気にしていたあの頃、毎日が辛かった。なんでこんなふうに生んだんだと親を恨んだ。でも、すぐにめちゃくちゃ楽しい日々がやってきた。君にも、そんな日が必ず来る。

